

# 「蜘蛛の糸」とその材源に関する覚書き

山口 静 一

## (一)

童話「蜘蛛の糸」は一九一八年（大正七年）四月に書かれ同年七月、児童雑誌「赤い鳥」第一号に掲載された。鈴木三重吉の主宰するこの「赤い鳥」は、鷗外・藤村を始め白秋・未明・佐藤春夫など多くの文壇人を動員して、児童文学の向上とその芸術化のために、近代文学史上画期的な役割を果した雑誌である。芥川竜之介も、漱石門下の先輩である三重吉に奨められ、その趣旨に賛同したが、「蜘蛛の糸」執筆の直接の動機であった。

大正七年と言えば竜之介二十七才、海軍機関学校教官の職にあつて、すでに二つの短篇集「羅生門」・「煙草と悪魔」を前年に上梓し、「袈裟と盛遠」・「地獄変」をそれぞれこの年に中央公論と大阪毎日新聞に発表して、新進作家としての名声を急速に高めていった時期にあたる。

## (二)

さて、発表された「蜘蛛の糸」はさっそく芳賀矢一の国語

読本に収録され、「その翌年には、中学校女学校の読本に大いそれが転載され<sup>(1)</sup>」<sup>(2)</sup>というほどの好評を博した。また、この作品のもつ意義に関しても、多くの作家あるいは近代文学研究者たちによって論ぜられてきた<sup>(3)</sup>。しかしながら、作品の材源に関するかぎり、いまだ実証的研究が尽されているとは断じがたい点がある。作品と素材とは、その関係のあり方によつては、作品論乃至作家論にも影響するところが少なくないと信ずるので、敢て卑見を述べようと思う。

現在「蜘蛛の糸」の素材と考えられているのは、吉田精一氏の見解によるもので、ドストエフスキー「カラマゾフの兄弟」中の説話「一本の葱」であるとされている。それ以前に材源に関する疑問がまったく無かつたわけではない。一九二八年（昭和三年）に鈴木三重吉は「蜘蛛の糸」を「創作的再話」の代表的作篇である<sup>(4)</sup>と述べているし、一九四二年（昭和十七年）には楠山正雄が「この童話にも、どこか西洋人の作者の書いた東洋の物語といった感じがする<sup>(5)</sup>」という、後述するように、鋭い洞察を示している。吉田精一氏の「一

本の「葱」説によって、材源の詮索はむしろ中断したと言わざるを得ないのである。

「一本の葱」の説話は「カラマゾフの兄弟」(一八八一年刊)「第七篇の第三に、昔噺として語られている。「蜘蛛の糸」材源研究の現状を明らかにするため、米川正夫氏の訳によって紹介してみよう。

「昔々或るところに意地の悪い悪いお婆さんがいたんですとき。それが死んだとき、跡に何一ついい行いが残らなかつたので、サタンはお婆さんを捕まえて火の湖へ投げ込んだ。お婆さんの守護の天使は、何か神様に申し上げるようないい行いがあのお婆さんにないかしらんと、じっと立って考えているうちに、やっと或ることを思い出したので、神様に向いて、あのお婆さんは畑から葱を抜いて来て、乞食女にやったことがありますと言ったのよ。すると神様は、ではお前一つその葱を取って来て、それに纏まらしてたぐるがいい。もし首尾よく湖の外へ引き出せたら、お婆さんを天国へやってもよい。またもし葱がちぎれたら、お婆さんは今の場所へそのまま置かれるのだぞ、とこういうご返事なんですとき。天使はお婆さんのところへ走って行って、葱を差し伸べながら、そら、お婆さん、これに纏まっておたぐりと言って、そろっと気をつけて引き始めたのよ。そうして、もう大方ひき上げようとしたところへ、湖の中にいるほかの餓鬼どもが、お婆

さんが引き上げられているのを見て、自分らも一緒に出して貰おうというので、みんなでお婆さんの悪い悪い女だから、みんなを足で蹴散しながら、引いて貰ってるのはわたしだよ。お前さん達じゃありやしない。わたしの葱だよ、お前さん達のじゃありやしない、とそういうが早い、葱はふつりと切れちゃったのよ。そしてお婆さんはまた湖へ落ちて、今までずっと燃え通しているんだって。天使は泣く泣く帰ってしまいましたとき。(5)」

以上が葱の話のすべてである。どんな悪人にも慈悲の心があつてそれが救いへの契機となること、しかしまた、自分さえよければというエゴイズムが結局は他人ばかりでなく自分をも破滅に導くものであること。そういうテーマを、二つの話は共通してもっている。しかもお婆さんとカンダタ、火の湖と地獄の血の池、神様とお釈迦さま、乞食女と蜘蛛、一本の葱と蜘蛛の糸、これらはほとんど完全に相対照していると言つてよい。

実は素材をこの程度にまで改変することさえ、卓越した才能が無ければ不可能なことであつて、「蜘蛛の糸」の種をここに求めるかぎり、創作家としての芥川竜之介の姿は大きく浮かび上がると共に、「仏典めかしてあるのは作者の仮構である(6)」とする吉田精一氏の見解も当然首肯されるのである。

だが、果してそうであろうか。「蜘蛛の糸」に關するかぎり、これだけの材料で「一本の葱」を素材と断定するわけにはいかないようである。

註(1) 楠山正雄(昭17)―新潮社「日本童話名作選集―蜘蛛の糸・りんごのお化」あとがき―二二八ページ。

註(2) 吉田精一(昭37)―至文堂「鑑賞と批評」―一二三ページ―一五五ページ。

註(3) 鈴木三重吉(昭3)―改造社現代日本文学全集第三篇「少年文学集」叙。

註(4) 楠山正雄(昭17)―註(1)に同じ。

註(5) 米川正夫訳「カラマゾフの兄弟」河出書房世界文学全集第一卷二八九ページ。

註(6) 吉田精一(昭33)―「芥川文学の出典」角川書店近代文学鑑賞講座第一卷三三三ページ。

### (III)

「蜘蛛の糸」の材源探索にあたって、今まで、トルストイの「カルマ」が検討されなかったのは不可解なことと言わなければならぬ。「カルマ」は、一八九四年(明治二七年)に、翻訳としてロシアの一雑誌(7)に掲載された、仏教的因果応報の物語であり、この物語の中心的要素として、カンダタと蜘蛛の糸の話が登場するのである。「カルマ」におけるカンダタの位置を明らかにするため、次にその梗概を述べることにする。

物語は、宝石商が下僕を連れて、馬車でベナレスの町に向

かうところから始まる。途中、宝石商は親切心から、同じくベナレスに向かうバラモン僧ナラダを馬車に乗せてやる。やがて彼らは、米俵を積んだ農夫の荷馬車が、故障して道を塞いでいるのに出会う。宝石商は、自分の馬車を進ませるため下僕に命じて農夫の荷馬車を転覆させてしまう。バラモン僧はそこで宝石商に別かれ、農夫を手助つて毀された荷馬車を修理し、農夫とともにベナレスの町に向かう。途中、農夫は宝石商の落とした財布を拾う。一方、ベナレスに着いた宝石商は財布の無いのに気づき、下僕に嫌疑をかけて投獄する。

農夫が財布を宝石商に返したので下僕の疑いは晴れるが、下僕は主人を恨んで逃亡し、盜賊の首領になってしまふ。ベナレスの町では反対派による米の買占めが行なわれ、宝石商の取引相手であった銀行家は破産寸前であったが、農夫の積んできた米のお蔭で救われ、その結果、宝石商の取引も成功する。不思議な因縁(カルマ)を感じた宝石商は、バラモン僧のためになりつばな寺院を寄附する。その後、宝石商は山の中で昔の下僕が首領になっている盜賊団に襲われ、すべての財宝を失って破産しそうになる。一方、奪った財宝を隠した首領をめぐって盜賊の同志討ちが始まり、仲間を倒した首領は瀕死の重傷を負う。このとき山の中を通りかかったバラモン僧ナラダの弟子パンタカは、首領にカンダタの話をして前非を悔い改めさせる。死の直前に改心した首領は、財宝のありかを教えて息が絶える。再び財産を取り戻した宝石商は幸福な余生を送り、やがて死の床に就いたとき、子供た

ちや孫たちを枕頭に集めて、次のように言う。

『可愛い子供達よ、お前達は決して自分達の失敗に人を非難してはならないよ。お前達の不幸の原因をお前達自身の中に求めるがいい。若しお前達が自負心の為めに盲目にされてさへるなければ、お前たちはそれを見出し、それを見出すと共に悪からのがれる事が出来るだらう。お前達の不幸を癒やす薬はお前達自身の中にある。お前達の心の眼を決してマイイの布で蔽はれないやうに……わしの一生の護符まもりふたであった次の言葉をよく覚えておくがいい——

『他人に対して痛い事をする者は、自分に対して悪を為すものである。』

『他人を助ける者は自分を助ける者である。』

『個人といふ誤った観念を忘れるがいゝ、——すればお前達は正しい道へ入るだらう。(8)』

「カルマ」は以上のように、トルストイの言葉を借りれば「悪を避けて福を得る事はたゞ自己の努力に依る外ないといふ事、自己の個人としての努力をよそにして自己乃至一般の福を得るやうな方法はない、またある筈がない(9)」という教訓に貫かれた説話である。また特にパンタカが盗賊の首領に語ったカンダタの話を、トルストイは翻訳の序文において「そこに個人の福祉はたゞそれが一般の福祉である場合におけるのみ真の幸福であるといふ事の示されてゐる(10)」点で激賞し、

これをキリスト教的見地から、すなわち「生命は個人の否定の中にのみある(11)」また「人々の幸福はたゞ神との結合にある(12)」とする聖書の啓示から、特に有益な教訓と考えて紹介する旨を、明白に述べている。

以下、中村白葉の重訳によって、カンダタの話を紹介しよう。

「そこでパンタカは言った——

『あなたの心にある罪深い慾望を根絶やしにし、悪い煩惱を去って、自分の魂を万物に対する善良な心で満たすやうになさい。』

首領は言った——

『わたしは悪い事ばかり多くして、いゝ事をしませんでした。どうしてわたしに、悪い慾望の為に自分の心にかけたこの歎きの網からのがれる事が出来ませう？ わたしのカルマはわたしを地獄へおびき寄せます、わたしにはとても救ひの道へ入る事なんか出来るわけがありません。』

そこで坊さんは言った——

『さうです、あなたのカルマは未来の生活で、あなたの蔭かれた種からはえるものを刈る事になるでせう。悪い事をした者にとっては、自分の悪行の結果からのがれる道はありません。併し失望なさるには及びません——どんな人でも救はれる事は出来るのですから。併しそれには一つ条件があります。それは人は個々であるといふ誤解を根絶す

るといふ事です。そのいふ例として、わたしはあなたに大泥棒カンダータのお話を致しませう。その男は悔い改める事をしないで死んでしまつて、新しく悪魔となつて地獄へ生まれかかりました、そこで彼は自分の悪行の爲めに一番恐ろしい苦しみを受けました。彼はもう幾年もく地獄にゐて、そのみじめな状態からのがれる事が出来ませんでした。その時地上には仏陀が現はれて、輝かしい幸福な時代が出現しました。この記憶すべき時代に、光の一線が地獄へも落ちて、すべての鬼どもの心に生命と希望とを呼びさしました、そこで盜賊カンダータは大声で叫びました——「お、光榮ある仏陀よ、どうぞわたしを憐れんで下さい——わたしは恐ろしく苦しんでゐます！ わたしは悪い事はしましたけれども、今では正しい道を歩きたいと思つてゐます。併しわたしは苦しみの網からのがれる事が出来ません。どうぞわたしを助けて下さい。主よ、わたしを憐れんで下さい！」つまりカルマの掟といふのはかういふもので悪行は人を滅びに導くものなのです。

「仏陀は、地獄で苦しんでゐる鬼の歎願を聞くと、彼のところへ蜘蛛の巣にのせた蜘蛛をお遣はしになりました。と、その蜘蛛がかう申しました。——「わたしの網におつかまりなさい、そしてそれを伝つて地獄から脱け出しなさい。」蜘蛛の姿が見えなくなると、カンダータはその網につかまつて、それを伝つてのぼり始めました。蜘蛛の網は非常に丈夫だったので切れませんでした。そして彼はそれを伝つて段々上へ上へと昇つて行きました。突然彼は、蜘蛛の糸がふるへ揺れるのを感じました、何故なら、彼のとから外の亡者どもが、網を伝つて昇り始めたからです。カンダータはぎよつとしました——彼は糸の細さを見ました、その糸が急に増した重みから、ずん／＼のびて行くのを見ました。併し糸はまだ彼を支へてゐました。カンダータはこれまでは上ばかり見てゐたのですが、今では下ばかり見てゐて、自分のあとから網を伝つて、地獄の住民の無数の群れがのぼつて来るのを見ました。《この細つこい蜘蛛の糸がこんなに大勢の人の重みにどうして保ちやうがあらう。》彼はかう考へました、そして愕然として、大声に叫びました——「この糸を放せ、これはおれのだ！」と言ふや否や、忽ち蜘蛛の糸はきれて、カンダータはもとの地獄へ真逆さまに落ちこみました。カンダータの心には個人主義の誤解がまだ生きてゐたのです。彼は正しい道へ入る爲めに向上しようとする真面目な傾向の奇蹟的な力を知らなかつたのです。この傾向は蜘蛛の糸のやうに細い、けれどもそれは幾百万の人々を持ち上げます、そしてこの糸を伝つて昇る人がふえればふえる程、その一人一人には益々楽になるのです。併し、その人の心に、この糸は自分のだ、正しさの幸福は自分一人に属するものだ、誰にだつて分けてやるものかといふ考へが起るや否や、糸は切れて、人はもとの個々別々の状態へ落ちてしまふ。人の個々別々といふ思想は呪ひであり、共同一致の思想は祝福です。地獄

といふのは何でせう？ 地獄といふのはとりも直さず利己心の事で、涅槃といふのは一般的の生命の事です……』

『ではどうかわたしにその蜘蛛の糸につかまらして下さい。』と瀕死の盜賊団の首魁マガドウータは、坊さんがその話を終った時にかう言つた。『そしたらわたしも地獄の深淵から脱け出します。』<sup>13)</sup>

註(7) 雑誌名不詳—トルストイ訳「カルマ」序文による。

註(8) 岩波書店「トルストイ全集」第一〇巻(冊5) —「カルマ(中村白葉訳)」七四九〜七五〇ページ。

註(9) トルストイ全集(註(8)に同じ) 七三四ページ。

註(10) トルストイ全集(註(8)に同じ) 七三四ページ。

註(11) マタイ伝第一〇章第三九節。

註(12) ヨハネ伝第一七章第二二節。

註(13) トルストイ全集(註(8)に同じ) 七四五〜七四七ページ傍  
点重訳者。

#### (四)

トルストイが「カルマ」を訳した一八九四年といえは、「イヴァン・イリイチの死(一八八六年)」、「クロイツェル・ソナタ(一八九〇年)」以来、ますます教訓的・道徳的傾向の強い作品を書くようになった時期にあたる。トルストイは数多くの翻訳を手がけた作家ではなかったが、エゴイズムという人生の宿命的な問題を深く考えさせる小品として、この「カルマ」を訳出する気になったのであろう。原文は、翻訳の際トルストイが雑誌社に宛てた書簡に簡単に触れている。

に<sup>14)</sup>、「オープン・コート(「広場」の意)」と称するアメリカの雑誌に掲載されていたものである。

雑誌「オープン・コート」は、「科学的基盤に立つて倫理宗教を確立する<sup>15)</sup>」という理想を掲げ同名の出版社から一八八七年二月にシカゴで創刊された宗教的色彩の強い総合誌で、ポール・ケールス(Paul Carus 1852—1919)とウィリアム・生まれの東洋哲学者が、その編輯発行人となっている。始めは隔週のちに週刊となり、P・Cの署名で「カルマ」=「KARMA. A TALE WITH A MORAL」が掲載されたのはその三六八号<sup>16)</sup>、一八九四年にあたる。トルストイは従つて、「オープン・コート」を手にした同年をさへロシア語に翻訳したわけである。

署名のP・Cは、雑誌の目次から明らかのように<sup>17)</sup>、編輯者すなわちポール・ケールス自身である。原文は、二三の重要な点を除いてトルストイ訳と同じであるが、「蜘蛛の糸」のキャンダタが最初に登場する作品と考えられるので、その部分を原文から引用することにする。

Said Panthaka: "Root out your sinful desires;  
destroy all evil passions, and fill your soul with  
kindness toward all your fellow beings."

The robber chief said: "I have done much evil  
and no good. How can I extricate myself from the  
net of sorrow which I have woven out of the evil

desires of my own heart? My Karma will lead me to hell and I shall never be able to walk on the path of salvation."

Said the shramana<sup>(18)</sup>: "Indeed your Karma will in its future incarnations reap the seeds of evil that you have sown. There is no escape for an evil doer from the consequences of his own actions. But there is no cause for despair. The man who is converted and has rooted out the illusion of self with all its lusts and sinful desires will be a source of blessing to himself and others.

"As an illustration I will tell you the story of the great robber Kandata who died without repentance and was reborn as a demon in hell where he suffered for his evil deeds the most terrible agonies and pains. He had been in hell several kalpas<sup>(19)</sup> and was unable to rise out of his wretched condition when Buddha appeared upon earth and attained to the blessed state of enlightenment. At that memorable moment a ray of light fell down into hell quickening all the demons with life and hope, and the robber Kandata cried aloud: 'O blessed Buddha, have mercy upon me! I suffer greatly and although I have done evil, I am anxious to walk

in the noble path of righteousness. But I cannot extricate myself from the net of sorrow. Help me, O Lord; have mercy on me!' Now it is the law of Karma that evil deeds lead to destruction, for absolute evil is so bad that it cannot exist. Absolute evil involves impossibility of existence. But good deeds lead to life. Thus there is a final end of every deed that is done, but there is no end in the development of good deeds. The least act of goodness bears fruits containing new seeds of goodness and they continue to grow, they nourish the soul in its weary transmigrations<sup>(20)</sup> until it reaches the final deliverance from all evil in Nirvāna.<sup>(21)</sup> When Buddha, the Lord, heard the prayer of the demon suffering in hell, he sent down a spider on a cobweb and the spider said: 'Take hold of the web and climb up.' When the spider had again disappeared out of sight, Kandata made great efforts to climb up and he succeeded. The web was so strong that it held, and he ascended higher and higher. Suddenly he felt the thread trembling and shaking, for behind him other fellow sufferers of his were beginning to climb up. Kandata became frightened. He saw the thinness of the web, and

observed that it was elastic, for under the increased weight it stretched out; yet it still seemed strong enough to carry him. Kandata had heretofore only looked up; he now looked down and saw following close upon his heels, also climbing up on the cobweb a numberless mob of the denizens of hell. How can this thin thread bear the weight of all, he thought to himself, and seized with fear he shouted loudly; 'Let go the cobweb. It is mine!' At once the cobweb broke and Kandata fell back into hell.

"The illusion of self was still upon Kandata. He did not know the miraculous power of a sincere longing to rise upwards and enter the noble path of righteousness. It is thin like a cobweb but it will carry millions of people, and the more there are that climb it, the easier will be the efforts of every one of them. But as soon as in a man's heart the idea arises: 'This is mine, let the bliss of righteousness be mine alone and let no one else partake of it,' the thread breaks, and you fall back into your old condition of selfhood, for selfhood is damnation and truth is bliss. What is hell? It is nothing but egotism, and Nirvāna is a life of righteousness."  
"Let me take hold of a spiderweb," said the dying

robber chief, when the shramana had finished his story, "and I shall pull myself up out of the depth of hell!"<sup>(22)</sup>

トルストイ 訳と比較してみると、まず、バラモン僧パンタカが盜賊の首領に対して悪行の結果から逃れるすべのないことを説き、しかも失望するには及ばないと言つて、「どんな人でも救はれる事は出来るのですから。併しそれには一つ条件があります。それは人は個々であるといふ誤解を根絶することゝふ事です」と説くところが、原文では「人間は悔い改め自我の迷いを捨てすべての煩惱を却ければ、それが結局自分も他人もともに救われる道にながるのです。」となつていて、特に自己ともに救済される道がより明らかに述べられてゐる点である。また、カンダタが仏陀に憐れみを乞ふたあとで「つまりカルマの掟といふのはかういふもので、悪行は人を滅びに導くものなのです」とあるところが、原文ではそれに続けて、悪は滅び善は生ずること、どんな小な善行でもそれはやがて悪から救出される契機となることを説いてゐる。

註② トルストイ全集(註②と同く)七三四ページ。

註③ "The Open Court" Vol. 1, No. 1, Feb. 17, "The Open Court, A Fortnightly Journal, Devoted to the Work of Establishing Ethics and Religion Upon a Scientific Basis."

註⑧ “The Open Court” No. 368—P. 4222.

註⑨ “The Open Court” 註⑤に同。

註⑩ 僧侶のこと。

註⑪ 「劫」—仏教でいう「時」の単位、「非常に長い間」という意味。

註⑫ 仏教でいう「輪廻」のこと。

註⑬ 仏教でいう「涅槃」のこと。

註⑭ “The Open Court” No. 368—pp. 4220—4221.

註⑮ 筆者訳。

### (五)

さて、「カルマ」と芥川竜之介の「蜘蛛の糸」との関係であるが、芥川が「カルマ」の物語を知っていたということはもはや疑いをさし挟む余地のないところであろう。しかもこの場合、トルストイはまったく介在していないであろうという推論は、物語「カルマ」のその後の経緯を辿れば自ら明らかである。

「カルマ」は発表後ただちにトルストイによって翻訳され、文豪トルストイの名によってヨーロッパの各国に紹介されることになるのだが、オープン・コート社では翌一八九五年（明治二八年）、「カルマ」を始めて単行本として、日本で出版することになった。このいきさつに関しては、一八九三年すなわち「カルマ」発表の前年九月にシカゴで開催された世界宗教会議にまでさかのぼらねばならない。この会議は、日本仏教が演説や文書を通じて正式に欧米に紹介された最初

で、特に禅宗の代表として出席した円覚寺派の管長釈宗演師（1859—1919）の「仏教の要旨ならびに因果法」と題する演説は、聴衆に非常な感銘を与えたのである<sup>24</sup>。ポール・ケーラスが日本の禅僧釈宗演を知ったのはこの時であった。翌年、ケーラスから宗演に自著 “The Gospel of Buddha” が贈られたのも、宗演に対する敬意の現れであった。宗演はこれを鈴木大拙に翻訳させ、これが縁となって大拙は宗演の推薦で一八九七年にアメリカに渡り、オープン・コート社の東洋部門を担当することになったほどである。ケーラスが仏教的因果応報の物語である「カルマ」を、特に日本で刊行する意図を持った理由は、これで推測できるであろう。

ポール・ケーラス著日本版「カルマ」は、東京の長谷川書店をオープン・コート社の代理店とし、山水画家鈴木華<sup>か</sup>華<sup>か</sup>の彩色の挿絵を入れ、いわゆるクレイプ・ペーパー版として発行された。しかも翌一八九六年（明治二九年）にはこの英文の書物が、再版されたほどの売行きを示した。

日本版の「カルマ」（以後「カルマⅡ」と略称）は、雑誌「オープン・コート」所載の「カルマ」（以後「カルマⅠ」と略称）に大分筆を加えたものである。ストーリー自体に本質的な差異はないが、カンダタの話の部分における加筆は、後述するように、芥川との関係において決定的な問題を提起する。

全体的に見れば「カルマⅡ」の方はかなり描写が細かく、装飾的な文が目立って「物語」的性格が強い。また、「カルマ

「I」では全文を“KARMA: A TALE WITH A MORAL”  
として細分してごらるのに対して、「カルマII」では“KAR-  
MA: A STORY OF EARLY BUDDHISM”のあとに語を  
各項目に分け、オムニバスの手法が使われているのが特徴じ  
ある。カンダタの登場する場面では“THE SPIDER WEB”  
すなわち「蜘蛛の糸」という題がつけられている。ふぎ一この特  
徴は「カルマII」では、特に教訓的な部分において、出典を  
明示する脚註が数カ所にわたって付せられていることであ  
る。「カルマI」では、語註が二ヶあるに過ぎなご。

一九〇三年(明治三十六年)に至って、「カルマI」は二度目  
の改訂を終って、“KARMA: A STORY OF BUDDHIST  
ETHICS”としてオーペン・ロートの本社およびロンドン  
の代理店 KEGAN PAUL 社から出版された(以後、「カルマ  
III」と略称)。これは「カルマII」の挿絵を黒白で正確に複  
写してあり、内容も「カルマII」とほとんど同一である。表  
現方法の差異と、小文字を大文字に訂正した点がところどころ  
目につく程度である。

次に、多少繁雑になるのを覚悟して、「カルマII」に従っ  
て「カルマI」とは異なるカンダタの語を引用しよう。なお、  
( ) は「カルマIII」で省略された部分、「[ ]」は付加され  
た部分を示す。

### THE SPIDER WEB.

While the charitable samana(25) washed the

wounds, the robber chief said: "I have done much  
evil and no good. How can I extricate myself from  
the net of sorrow which I have woven out of the  
evil desires of my own heart? My Karma will lead  
me to (hell) [Hell] and I shall never be able to  
walk in the path of salvation."

Said the samana: "Indeed your Karma will in its  
future incarnations reap the seeds of evil that you  
have sown. (There is no escape (for an evil doer)  
from the consequences of (his own) [our] actions.  
But there is no cause for despair. The man who  
is converted and has rooted out the illusion of self,  
with all its lusts and sinful desires, will be a  
source of blessing to himself and others.

"As an illustration, I will tell you the story of  
the great robber Kandata, who died without repen-  
ance and was reborn as a demon in (hell) [Hell],  
where he suffered for his evil deeds the most  
terrible agonies and pains. He had been in (hell)  
[Hell] several kalpas and was unable to rise out  
of his wretched condition, when Buddha appeared  
upon earth and attained to the blessed state of  
enlightenment. At that memorable moment a ray  
of light fell down into (hell) [Hell] quickening all

the demons with life and hope, and the robber Kandata cried aloud: 'O blessed Buddha, have mercy upon me! I suffer greatly, and although I have done evil, I am anxious to walk in the noble path of righteousness. But I cannot extricate myself from the net of sorrow. Help me, O Lord; have mercy on me!' Now, it is the law of Karma that evil deeds lead to destruction, for absolute evil is so bad that it cannot exist. Absolute evil involves impossibility of existence. But good deeds lead to life. Thus there is a final end to every deed that is done, but there is no end to the development of good deeds. The least act of goodness bears fruit containing new seeds of goodness, and they continue to grow, they nourish (the soul in its weary trans-migrations) [the poor suffering creatures in their repeated wanderings in the eternal round of Saṃ-sāra<sup>(26)</sup>] until (it reaches) [they reach] the final deliverance from all evil in Nirvāna. When <sup>(27)</sup> Buddha, the Lord, heard the prayer of the demon suffering in (hell) [Hell], he said: 'Kandata, did you ever perform an act of kindness? It will now return to you and help you to rise again. But you cannot be rescued unless the intense sufferings which you

endure as consequences of your evil deeds have dispelled all conceit of selfhood and have purified your soul of vanity, lust, and envy.'

'Kandata remained silent, for he had been a cruel man, but the Taṭhagata<sup>(28)</sup> in his omniscience saw all the deeds done by the poor wretch, and he perceived that once in his life when walking through the woods he had seen a spider crawling on the ground, and he thought to himself, 'I will not step upon the spider, for he is a harmless creature and hurts nobody.'

'Buddha looked with compassion upon the tortures of Kandata, and sent down a spider on a cobweb and the spider said: 'Take hold of the web and climb up.' (When the spider had disappeared, Kandata made great efforts to climb up, and) [Having attached the web at the bottom of Hell, the spider withdrew. Kandata eagerly seized the thin thread and made great efforts to climb up. And] he succeeded. The web was so strong that it held, and he ascended higher and higher. Suddenly he felt the thread trembling and shaking, for behind him (other fellow sufferers of his) [some of his fellow sufferers] were beginning to climb up.

Kandata became frightened. He saw the thinness of the web, and observed that it was elastic, for under the increased weight it stretched out; yet it still seemed strong enough to carry him. Kandata had heretofore only looked up; he now looked down, and saw following close upon his heels, also climbing up on the cobweb, a numberless mob of the denizens of (hell) [Hell]. How can this thin thread bear the weight of all? (29) he thought to himself, and seized with fear he shouted loudly: 'Let go the cobweb. It is mine!' At once the cobweb broke, and Kandata fell back into (hell) [Hell].

"The illusion of self was still upon Kandata. He did not know the miraculous power of a sincere longing to rise upwards and enter the noble path of righteousness. It is thin like a cobweb, but it will carry millions of people, and the more there are that climb it, the easier will be the efforts of every one of them. But as soon as (in a man's heart) the idea arises [in a man's heart]: 'This is mine; let the bliss of righteousness be mine alone, and let no one else partake of it,' the thread breaks, and (you fall) [he will fall] back into (your) [his] old condition of self-hood, (30) for self-

hood is damnation, and truth is bliss. What is (hell) [Hell]? It is nothing but egotism, and Nirvāna is a life of righteousness.

"Let me take hold of a spiderweb," said the dying robber chief, when the samana had finished his story, "and I will pull myself up out of the depth of (hell) [Hell]."

註(29) 芳賀幸四郎(和名)「朝日ジャーナル」第四卷四〇号所載

「釈宗演」

註(30) 僧侶のじゅう一"shramana" (註(28) 同頁)。

註(31) 輪廻のじゅう一"transmigrations" (註(28) 同頁)。

註(32) 「カルマ田」はWhen……以下が改行となつてゐる。

註(33) 「完全な人格者」すなわち仏陀のこと。

註(34) うが「カルマ田」は誤植。「カルマ田」にゆつた。

註(35) 「カルマ田」は self-hood のあやうなリフレクティブなつてゐる。

(六)

「カルマー」と「カルマ田・田」とのもつとも大きな相違は次の部分にある。

「カルマー」地獄に苦しんでゐる鬼の祈りをお聞きになり  
 ちちん、お釈迦さまは一匹の蜘蛛をその糸に吊して降ろして  
 びやのちぢた。ちちん、その蜘蛛は申さちぢた。「この糸

に纏まって登ってきなさい。」蜘蛛の姿が見えなくなりま  
すとカンダタは……(31)

「カルマⅡ・Ⅲ」地獄で苦しんでいる鬼の祈りをお聞きに  
なりますと、お釈迦さまはお尋ねになりました。「カンダ  
タよ、おまえは今までに善いおこないをしたことがありま  
すか。それが今度はおまえの身にもどってきて、おまえが  
立ち直る助けになつてくれるのです。おまえが今受けてい  
る苦しみは、今までの悪行の報いです。その苦しみによつ  
て、おまえが自分本位の考えを払いのけ、自惚れとか我  
欲・嫉妬心を捨て去ることができなければ、おまえは永久  
に救われぬでしょう。」カンダタは口をつぐみました。

カンダタは冷酷な男だったのです。しかしお釈迦さまは、  
その限らないお力によってこの哀れな男のやったあらゆる  
行為をお知りになっていたので、そして、かつて地上に  
いたとき、この男が森の中を歩いているうちに、一匹の蜘蛛が道を通っているのを見て、「おれはこの蜘蛛を踏みつ  
ぶすまい。無害な生き物で人を傷つけたりしないから」と  
つぶやいたことのあるのにお気づきになりました。

お釈迦さまは、お隣れみの心をもってカンダタの苦しみ  
をご覧になりました。そして一匹の蜘蛛をその糸に吊して  
降ろしてやりました。すると、その蜘蛛は申しました。

「この糸に纏まって登ってきなさい。」蜘蛛の姿が見えなく  
なりますとカンダタは……。「カルマⅢ」では「糸を地獄の

底につけると蜘蛛の姿は見えなくなりました。カンダタは  
……」となつている。(32)

この二つのテキストを比較してすぐわかるように、「カル  
マⅡ」・「カルマⅢ」では、カンダタが以前、森の中で一匹  
の蜘蛛を助けてやったという話が挿入されている。これはお  
そらく、「カルマⅠ」で

「善いおこないというものは、それがどんなに小さいこと  
であつても、やがて実を結ぶものです。そしてその実の中  
に、新しい幸福を約束する種子が入つているのです。」(33)  
と書いたことから、ケラスが新たに着想して付け加えたも  
のであるに違いない。人間の一切は報いであつて偶発的なも  
のはいつも存在しない、というのが「カルマ」の根本原則な  
のであるから。

さて、芥川の「蜘蛛の糸」の場合でも、蜘蛛を助けてや  
つたことが救いへの契機として描かれている。

この健陀多と云ふ男は、人を殺したり家に火をつけたり、  
いろいろ悪事を働いた大泥棒でございますが、それでもた  
つた一つ、善い事を致した覚えがございます。と申します  
のは、或時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛  
が一匹、路ばたを這つて行くのが見えました。そこで健陀  
多は早速足を挙げて、踏み殺さうと致しましたが、「いや、

いや、これも小さいながら、命のあるものに違ひない。その命を無暗にとると云ふ事は、いくら何でも可哀さうだ。」と、かう急に思ひ返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございませう。

御釈迦様は地獄の容子を御覧になりながら、この健陀多には蜘蛛を助けたことがあるのを御思ひ出しになりました。さうしてそれだけの善い事をした報には、出来るなら、この男を地獄から救ひ出してやらうと御考へになりました。幸、側を見ますと翡翠のやうな色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけて居ります。御釈迦様はその蜘蛛の糸をそと御手に御取りになつて、玉のやうな白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ、まっすぐにそれを御下しなさいました。

このことは、芥川が直接に材源として利用したものが、トルストイ訳の「カルマ」や雑誌「オープン・コート」所載の「カルマⅠ」ではなく、日本版の「カルマⅡ」乃至一九〇三年版の「カルマⅢ」であることを立証するに足るものである。

註例 筆者訳。

註例 筆者訳。

註例 筆者訳（トルストイ訳では省略されている）。

(七)

次に問題になる点は、「カルマⅡ」における教訓的な要素が、芥川の「蜘蛛の糸」では省略されていることである。前者では仏陀はカンダタに、救われる条件としてまず自我の迷いを捨て去るべきことを約束させている。しかしカンダタはこの約束を忘れて、ふたたび地獄に墮ちて行かなければならなかつた。そして実はこの切れた蜘蛛の糸は、「立ち直つて正しい道に入りたい」という人間の希望を象徴したもので、

それは何百万の人間を支え、それに縋りつく人々が増えれば増えるほど、人はたやすく登ることができるようです。しかし人間の心に、「これは俺のものだ、俺さえ立ち直ればよいのだ、ほかの奴らに分けてやつてなるものか」という考えが起ると、たちどころに糸は切れてしまふのである。

という奇蹟的な力を持っていたのだ、と説いてこの説話を終っている。

ところが芥川の「蜘蛛の糸」の場合、仏陀はカンダタに、救われるべき条件を呈示していない。しかも細い蜘蛛の糸を他の罪人どもが「蟻の行列のやうに」よじのぼって来るのを見て、

健陀多はこれを見ると、驚いたのと、恐いので、暫らくは唯、莫迦のやうに大きな口を開いた儘、眼ばかり動かし

て居りました。自分一人できへ断れさうな、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに堪へる事が出来ませう。もし万一途中で断れたと致しましたら、折角こへまでのぼって来たこの肝腎な自分までも、元の地獄へ逆落しに落ちてしまはなければなりません。そんな事があつたら、大変でございます。が、さう云ふ中にも、罪人たちは何百となく何千となく、まっ暗な血の池の底から、うようよと這ひ上って、細く光つてゐる蜘蛛の糸を、一列になりながら、せつせとのぼって参ります。今の中にどうかしなれば、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまふのに違ひありません。

と、カンダタの心に恐るべき不安をいだかせている。「今の中にどうかしなければ」自分も他の罪人たちもともに地獄へ墮ちてしまうであろうという不安は、純粹な恐怖心につながるものであった。自分が生きるか自他ともに滅ぶか、の二者択一を迫られた場合、はたして後者を選ぶ人間が存在するであろうか。そこに、利己心とか慈悲心とかの介在する余裕が考えられるであろうか。これはカンダタにとっては無論のこと、人間一般にとつての恐るべき試問であるに違いない。しかも芥川は、カンダタをふたたび地獄に墮としてから、救いへの道は蜘蛛の糸のごとく細いが無限の重さに堪え得る不思議な力を持っている、という「カルマII」の結論を故意に省略して、

御釈迦様は極楽の蓮池のふちに立つて、この一部始終をぢつと見ていらつしやいましたが、やがて韃陀多が血の池の底へ石のやうに沈んでしまひますと、悲しさうな御顔をなさりながら、又ぶらぶら御歩きになり始めました。自分ばかり地獄からぬけ出さうとする、韃陀多の無慈悲な心が、さうしてその心相當な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまったのが、御釈迦様の御目から見ると、浅間しく思召されたのでございませう。

と、冷たく突き放している。

これはエゴイズムに対する、というよりはある意味では、人間の暗い宿命に対する重大な疑惑と辛辣な批判とを示すものであり、昭和初期の作家たちの評したように、「極り切つた秩序ある世界をやすやすと受け入れて、そこに何らの懷疑の苦をも感じてゐない<sup>(35)</sup>」とか、「一時代の一階級の道徳律を越えることの出来なかつたモラリスト<sup>(36)</sup>」の姿を、そこに見ることはできないのである。そしてこの疑惑と批判が、近代文学研究者たちの、「決して明るい朗らかな童話ではない<sup>(37)</sup>」とか、「何処か澄み切らぬ、割切れない趣を残してゐる<sup>(38)</sup>」とかいった「蜘蛛の糸」論を招く原因をなしている。実際、このようなテーマは、同じころ同じ問題を扱つたものと考えられている<sup>(39)</sup> 菊池寛の作品「我鬼」にも見られぬものであるし、また芥川自身の他の童話、例えば「杜子春」・

「白」・「三つの宝」などに共通する「倫理的な美しさ」  
「明るくて暖い人間尊重の気持、素直で親しみのある人道的  
思想(40)」とも、まったく相容れぬ種類のものである。

しかし読者は、このような人間の暗い側面を扱うが故に  
「蜘蛛の糸」を童話としては不適切であると速断してはなら  
ない。「カルマII」におけるような条件と教訓とを省略すれ  
ば、この一篇が「割り切れない趣」を残したり「朗らかな童  
話では」なくなること、芥川が気づかなかつたはずはな  
い。芥川はここで教訓的要素を無視しカンダタを突き放すこ  
とによって、人間のうちにひそむ本来の醜さを、人間が生  
きて行くためには必要であるとさえ感じられるエゴイズムの  
問題を、読者に提示し読者に考えさせているのである。しか  
もこのような暗いテーマを、年少の読者に親しまれる短かい  
「童話」にすることが可能であるか。芥川は大きな抱負をも  
って、彼としては最初のこの童話に、努力を集中したに違  
ない。脱稿後「赤い鳥」の小島政二郎に宛てた書簡の中で、  
「御伽噺は甚しい加減なもので恐縮し切っています長い方が  
短いより余程わけはない「蜘蛛の糸」の方がもっと苦しみ  
ました(41)」と告白しているのは、この間の消息を説明する  
ものである。

このテーマを「童話」化するために、芥川はカンダタの話  
を幻想的なもので包み、彼一流の美文によって飾り立ててい  
る。彼はまず、物語を明るく極楽の蓮池の描写から始める。  
カンダタの話は、極楽の朝から昼までの穏やかな半日の間に

蓮池の底で起ったごく些細な、夢のような出来事に過ぎない  
のである。池の中に咲く蓮の花は「みんな玉のやうにまっ白  
で、そのまん中にある金色きんいろの蕊ねからは、何とも云へない好い  
匂におひが、絶間なくあたりへ溢あふれて」いる。蓮池の下には「水晶  
のやうな水を透き徹して、三途さんずの河や針の山の景色が、丁度  
覗き眼鏡を見るやうに、はつきりと」見える。また蜘蛛は  
「翳翠ひすゐのやうな色をした蓮の葉」の上に、「美しい銀色の糸  
をかけて」いる。そしてこの蜘蛛は「カルマII・III」では、  
糸に宙吊りになってカンダタに「この糸に掴まつて登つて来  
なさい」と言つてから姿を消すのであるが、これを芥川は、

所が或時の事でございます。何気なくなげ黠陀多かんだたが頭を挙げ  
て、血の池の空を眺めますと、そのひっそりとした暗の中  
を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目に  
かかるのを恐れるやうに、一すぢ細く光りながら、するす  
ると自分の上へ垂れて参るのではございませぬか。

と、ますます幻想的・神秘的な雰囲気の中で包んでしまふ。しか  
もこの糸は、カンダタがふたたび地獄に墮ちたあと、「さら  
さら」と細く光りながら、月も星もない空の中途に、短かく垂  
れてゐるばかりでございませぬ」と、読者に極めて強烈な余韻  
を与えている。

このような幻想性と美しいイマジエリーをふんだんに駆使  
することによって、芥川は、年少の読者に深い印象を与える

ことに成功した。若い読者を魅了すると同時に、前述の如く人間本来のエゴイズムを深く考えさせる点において年長の読者にも愛読させ、「蜘蛛の糸」一篇を香り高い文学作品の域にまで高めることに成功したのである。

われわれは「カルマⅡ・Ⅲ」との比較において、「蜘蛛の糸」に芥川の創作的才能を認めるわけにはいかなかった。しかしながら、「カルマ」の教訓をそのまま使用すれば安易な仏教説話にしかならなかったカンダタの話に、芥川はその材源処理の巧みな腕をもって永久の生命を吹きこみ、素材をみごとに生かして、文学作品としての「童話」を完成したのである。

註(4) 筆者訳。

註(5) 正宗白鳥(昭2)「芥川竜之介」岩波書店新書版芥川竜之介全集別冊「案内」所収一七七ページ。

註(6) 宮本顕治(昭7)「敗北の文学」新潮社版作家研究叢書「芥川竜之介研究」(福田恒存編)所収一五四ページ。

註(7) 吉田精一(昭33)「角川書店近代文学鑑賞講座第一巻」「芥川竜之介」所収六八ページ。

註(8) 片岡良一(昭12)「近代日本の作家と作品」所収五四八ページ。

註(9) 片岡良一(昭12)「註(8)に同じ。

註(10) 中村真一郎(昭31)「青木書店」「芥川竜之介の世界」一八二ページ。

註(11) 岩波書店新書版芥川竜之介全集第一六卷二六六ページ—小島政二郎宛書簡(大正七年十月一四日付)。

(附)

「蜘蛛の糸」の材源と直接に関係はないが、「カルマ」の物語がはたしてポール・ケーラスの原作であるかという問題が残っている。直感的にみてケーラスの創作ではないようにも思われるのであるが、つぎに挙げるいくつかの根拠は、いずれもケーラスの創作説を裏づけているように考えられる。

まずケーラス自身、「カルマ」の原作者たることを主張していることである。

「カルマ」がトルストイによって翻訳されて以来、ヨーロッパではこの物語は、文豪トルストイの名のもとに流布されることになった。まずトルストイ原作としてフランス語に翻訳された(註(4))ことから始まり、一八九七年には物語はドイツの宗教雑誌(註(5))に、おそらくはこの仏訳から、やはりトルストイ原著としてドイツ語に重訳された。ケーラスがトルストイ原作説に気づいたのは、「トルストイ著カルマ」がふたたびアメリカに逆輸入され、しかもオーブン・コート社と同区画にあるシカゴの一出版社から「英訳」される企画を知ったときのことであった。彼はすぐにトルストイに抗議を申し入れ、これに対してトルストイは、「この作品が小生の名で流布されていることを、あなたの手紙で始めて知りました」という書簡を送り、「このような虚偽が容認されていること」に深く遺憾の意を表した。ケーラスは以上のいきさつを、一九〇三年版「カルマⅢ」の序文で明記している。

またトルストイの翻訳から一年遅れた一八九五年に、ドイツの唯物論哲学者ビュヒナー<sup>(44)</sup>が、ケーラスの原文から「カルマ」を直接ドイツ語に訳している<sup>(45)</sup>のだが、彼はポール・ケーラスの署名 P・C を Pali Codex (パーリー語写本) 乃至 Pundit Collection (インド文献集) の略号と「誤解」した。この事実をも、ケーラスはやはり自著「カルマⅢ」の序文で述べているのである。これらが、ポール・ケーラスの創作説を裏づける第一の根拠である。

つぎに、それを証明するかのようには、雑誌に掲載された「カルマ」をケーラスが、「カルマⅡ」(一八九五年)「および「カルマⅢ」(一九〇三年)の両度にわたって加筆訂正を施したことが挙げられる。特に「カルマⅡ」で、蜘蛛を助けたのが救いへの契機となったというかなり重要なテーマを付加していることは、「カルマ」の物語自体に原本が無かった証拠と見る方が自然である。

第三に、「カルマⅡ」・「カルマⅢ」では、特に仏教の聖典から引用した部分を明らかにする脚註が付せられていることである<sup>(46)</sup>。これは逆に、「カルマ」のストーリー自体は、ケーラスの主張通り、サンスクリット文典やパーリー文典には出ていないことを裏書きしているようである。

第四に、吉田精一氏が「仏典めかしてあるのは作者の仮構である<sup>(47)</sup>」と断言されているように、カンダタの話が少くとも日本に伝わる仏典に見当らないことである。実際、大正新修大藏経や南伝大藏経の索引の中に、物語の片鱗を見出す

ことはできない。

第五に、「カルマ」の話自体が、楠山正雄の言うように「西洋人の書いた物語」と考えられるふしの多いことである。例えば、「カルマ」を最初に翻訳したトルストイがこの話をすぐに聖書の教説に結びつけて紹介したことは前述の通りである。事実、「カルマⅡ」においては、ケーラス自身、聖書からの引用をその脚註で示している<sup>(48)</sup>。また、「どんな悪人でも悔い改め自我の迷いを捨て去れば、それが自他ともに救われる道につながる」という「カルマ」全体に流れるモラルは仏教的であるとともにキリスト教的倫理に通ずるものでもある。

ポール・ケーラスは、通俗的ではあるが一千余のエッセイを書き五十冊以上の宗教論を発表するほどの精力的な仕事をした人であった。おそらく、数多くの仏教の聖典にある種々の因果物語からヒントを得て、「カルマ」物語をまとめあげたものであろう。この場合、吉田精一氏のいうドストエフスキーの「一本の葱」の話は、ケーラスの構想をまとめる上に大きな助けになったものかもしれない。しかしまた、「一本の葱」の話自体も、古くから南欧に伝わった民話であるからヨーロッパ生まれのケーラスの熟知するところのものであったかもしれない。いずれにしてもこの辺のことは、推測の域を出ないものである。

一方、ではまったく仏典にないかというところ、それも断言できない。例えば増一阿含経という仏典には、仏陀に放逐され

て地獄に落ちた悪鬼提婆達多に対して、仏陀の弟子が教えを説きに行く話がある<sup>④⑤</sup>。蜘蛛の話にしても、もしケーラスを疑うとすれば、日本には伝わらぬ仏典に出づることも考えられぬわけではない。さういふ点でこの「覚書」は、残念ながらもまた最終的なものになつてゐることは言ひ難い。

註<sup>④</sup> "Imitation," tr. by E. Halperine-Kaminsky (Société d'Éditions littéraires et artistiques, Paris).

註<sup>⑤</sup> "The Berliner Evangelisches Sonntagsblatt," May, 2, 1897 (No. 18, pp. 140—141).

註<sup>⑥</sup> Ludwig Büchner, 1824—1899.

註<sup>⑦</sup> "Ethische Kultur" (the organ of the German Ethical Societies, Berlin), June 1 and 8, 1895 (Vol. III, Nos. 22 and 23).

註<sup>⑧</sup> Jataka (本生經) / Anguttaranikāya (增一阿含經) / Dhammapada (法句)。

註<sup>⑨</sup> 吉田精一(昭三)一註(⑥)と同。

註<sup>⑩</sup> 再版(一八九六年)一七ページ。

註<sup>⑪</sup> 大正新修大藏經第二卷。